

孫たちから学んだこと

<1> チャップリンが投げかけた疑問

一年生の終りの春休みに孫の一人が単身で泊りに来ることになった。母親に連れられて来て、一人で我が家に滞在し、帰宅時にまた母親が迎えに来るという計画だった。幼稚園の時にこの旅を提案したら尻込みされたが、「間もなく二年生」ということで内心「やってみようかな」という気持ちが盛り上がり来たようだ。春休みの課題と毎日やっている勉強をきちんとこなすこと、おじいちゃんおばあちゃんの家でお手伝いをするなどやるべきことを書いたメモ紙がカバンの脇に置いてあった。

ある日の夕食後、「おじいちゃん、テレビ見たい」と言う。

「テレビもいいけど、面白い映画があるから一緒に見ようか？」と誘い、ブルーレイディスクに録画したチャップリンの映画を見せてやることにした。チャップリンを見せたいのが主たる動機ではなく、低俗なテレビ番組を見せるのは面白くないなと思っただけのことだった。

至る所で「あのおじさん何やっているの?」「あの人なぜ逃げているの?」などなど途中で解説を求める質問が矢のように飛んできたが、二日目になると少しは理解してきたようで「あの映画もう一度見たい」。二日間にわたって見た映画は「黄金狂時代」「街の灯」「モダンタイムス」「独裁者」「殺人狂時代」と「ニューヨークの王様」はちょっと難しいだろうと思って見せなかった。

サイレント時代の映画は、セリフが画面に大きく文字になって出てくるのでわかりやすいようだったが、トーキー時代の映画に入ると、一年生には理解できないセリフがかなりあったようだ。

「黄金狂時代」では、ゴールドラッシュに湧きかえって、列をなして山へ登って行く人、そこで起きる様々な出来事、そして随所に現れる愉快的なシーン。私の解説付きで、ほぼ内容は理解できたようだった。

「街の灯」では、盲目の少女との交流と画面に文字で出て来るセリフはわかりやすかったようだ。

「モダンタイムス」では、機械（システム）が人（労働者）を飲みこんでしまうのが面白くはあっただろうが、理由が飲み込めたかどうかわからない。

「独裁者」では、チャップリンが一人二役を演じていることを説明してやる必要があった。ユダヤ人が迫害を受けているシーンの説明には納得していなかった横顔だった。

旅が終わって家に帰ってしばらくしてから、娘（つまりこの子の母親）からこんな報告があった。

「一人でおじいちゃん・おばあちゃんの家泊ってどうだった?」の問いかけに、滞在期間中の出来事の報告があり、その中で「おじいちゃんとチャップリンの映画を見た」と。そしてその報告の中で……

「お巡りさんがいっぱい来て、家の入口にペンキで J E W って書いていたよ、J E W って何のこと?」

「お巡りさんが、皆を追っかけまわして捕まえていた」

「ママ、お巡りさんっていい人なの? 悪い人なの?」

一年生には理解できない映画だったこと、理解できないまでも頭に入ってしまうこと、そして素朴に感じたであろう疑問にその場での補足説明が不十分だったこと、難しい映画を見せてしまったな、と後悔した。

何でも吸収できるし、吸収したものが血になり肉になり心になる子どもたちに与える中途半端な情報の恐ろしさを痛感した体験だった。

<2> 負けて泣いて育つ

秋も終わりになる頃、もう一人の孫（一年生）から「学童保育の集まりのお楽しみ会があるから見に来てね」との誘いを受けた。直々にお誘いをいただいたので、喜び勇んで出向いて行った。

このイベントは、小学校一年生から三年生までの子ども達が集まって、歌や踊りなどを披露したり、ゲームをやったりのプログラムだった。一年生の歌や踊りには一年生らしい可愛さが漂い微笑ましいものだったし、三年生のケンダマは大人の目で見ても驚きに値するような腕前だった。

プログラムの最後に行われたゲームでは四つのグループに分かれて、スプーンレースや輪まわしなどの競技

を行うグループ対抗戦になっていた。

すべての競技が終わった後で、成績発表と表彰式という運びだったが……。

我が家の孫がグループ別に並ぶ列の中で蹲っていた。何をしているのかな？と思いながら遠くから眺めていたが、時が流れプログラムが進んでいるのに蹲ったまま動かない。時折隣に座っている仲良しちゃんが背中に手をやって語りかけているのが見えたので、転んで泣いているのかなと思った。仲良しちゃんの当惑顔が見えたので、近付いて見た。

「どうしたの？」と聞いても肩を震わせて泣いていて応答がない。すると仲良しちゃんが説明してくれた。

「一番になれなかったのが悔しかったんだって」

「そうか、一番になれなかったんで悔しくて涙が出ちゃったのか？」と声をかけたら、頷きが帰って来た。

「今日は一番になれなかっただろうけど、次にはがんばろうって思えばいいんだから、もう泣くのはやめな。

おじいちゃんのハンカチで涙を拭いて、元気出せるか？」 「うん」

涙をぬぐって、濡れたハンカチを返してくれた数分後、いつもの笑顔が蘇った。

子育ての世界で、勝ち負けや序列ができないような配慮に偏りすぎるのが流行った時期があった。

平等に、平穏に、無難にということだったようだ。

この子たちがやがて中学生になり、高校生になり、そして大人になって社会に出て行けば、否応なしに競争の場면을数多く体験することになる。その時に、挫折の体験や挫折からの脱出の体験は避けては通れない。勝者の喜びや敗者の嘆き、次には頑張ろうとする気持、目標や向上心を持つ心、目標に向かって努力すること、それが叶わなかった時の対応力などを身に付けておかなければならない。

「世の中には勝ち負けがあること」と「勝ちも負けも永遠のものではないこと」を、子どもの頃から数多くの経験を通して学んでおくのは大変大事なことだと感じた日だった。

以上